

年波の争はれないものでも腕も利かない日も薄くなつて来た。彼は働かうとしてもモウ使て呉れ手がない。永年働いた工場へ行つても矢張り使つてはくれない。彼はその日／＼を糊して行く爲めに働かうにも職がないのである。之は實に「老」と「病」の大事實ではないか、而し之れ許しが現代産業社會の悲劇ではない。身に何等の病もなく元氣旺盛なる青年労働者でも經濟界の不況に遭遇すれば最後、彼は工場の縮少破産の爲めに何時解雇されて失職の憂目を見るかも知れない。之といふのも近世の産業組織といふものが眞の需要に對する供給ではなく市場の景氣を自算として大量の生産をする自然の結果である。だから市場の景氣の波動につれて失業者の群は増減するのである。

斯くの如くプロレタリアなるものは日一日、年が年中、只だ平凡な荒野に似たる生活をして行つてゐるので其處には何等の滋味もなく慰安もなく活氣もない。しど／＼と降る春雨に閉じ込められた形で無意味に一生を過ぎて了ふのである。朝は早くから工場に這入つて蒸暑い濕氣の中に耳を聳する許りの機關の音を聞き乍ら有毒瓦斯を吸ひつゝ宛るで機械の如く働いてきて待ちに待つた終業の笛と共に綿のやうに疲れた身體を起して家に戻ると、其處には低く不潔な我が家に血の氣のない女房子供が待つてゐる。斯くして我輩等は年が年中否その生涯を同じ事を返して暮して行の。正月が来やうが祭が来やうが酌に美酒もなく、訪る者は借金取のみだ。我輩等は未だ襦袢を取るや取らずやにして早くも工場へ追ひやられ、年頃になれ